



小林久男教授 御近影

小林久男教授の人と業績

細渕富夫 埼玉大学教育学部特別支援教育講座

“コバキュー”、学生たちはアニメの人気キャラクターになぞらえ、小林久男先生のことを親しみを込めて、こう呼んでいるようです。小林先生は学生をととても大事にしていますが、ゼミ合宿等で学生たちと交流することを毎年楽しみにしており、例年近隣の温泉地、観光地等へゼミ合宿にでかけています。一方、授業では学生たちを相当厳しく指導し、先生の担当する「障害児の心理と指導（障害児心理学）」（1年次必修）の授業はなかなか単位が取れないことで有名です。特別支援教育専修学生であっても、1年次には4分の1ほどの学生が単位を落としているようです。「発達と障害について基礎的な理解が足りない」との理由で、4年次によく単位をとれた学生も少なくありません。将来、特別支援学校教師として最低限身につけておくべき知識については妥協しない、ということでしょう。

さて小林先生は、1945(昭和 20)年 10 月 10 日に茨城県結城郡千代川村（現在は下妻市）で生まれ、1965（昭和 40）年 4 月に、東京学芸大学初等教育教員養成課程に入学されました。学芸大では教育心理学を専攻されています。東京学芸大学在学中、ソビエトの生理心理学への関心を深め、ロシア語の学習に力を入れたそうです。特に関心をもっていた分野は個人差の生理心理学で、ここで後の生理心理学的研究をすすめる問題意識をもたれたものと思います。当時ロシア語を丁寧に教えていただいたのが、松野豊講師（後に東北大学教育学部教授）でした。松野先生のお話によれば、「小林君はよく実験を

手伝ってくれるし、まじめに勉強するととても熱心な学生だった」とのことです。松野先生のお宅には東京教育大学大学院進学後も毎週のように通ってロシア語の学習を続けていたとのことでした。

1969（昭和 44）年 4 月、東京教育大学大学院修士課程に進学し、実験心理学を専攻されました。ここでは、岩原信九郎教授のもとで生理心理学、特にまだ研究の蓄積が乏しい脳波を用いた生理心理学研究に力を入れています。小林先生が初期に発表された誘発電位に関する 2 つの論文はこのときの研究成果だと思われます。

続いて同大学院教育学研究科博士課程に進みますが、1973（昭和 48）年 4 月、博士課程 1 年次終了と同時に東北大学教育学部助手になりました。これは前述の松野講師が東北大学教育学部に新設された「知能欠陥学講座」の助教授に就任され、その助手として小林先生が呼ばれたためでした。

知能欠陥学講座は、松野先生の指導のもとにソビエト心理学を理論的ベースにした知的障害のある子どもの心理、生理、教育に関する研究を行っていました。この研究室では大学院生がいくつかの研究グループに分かれ自主的にソビエト心理学関係雑誌の文献抄読会を開くなど、活発に活動していました。

小林先生は助手として、大学院生、学部学生の指導にもあたっておられましたが、実は私（細渕）と小林先生との最初の出会いがこの知能欠陥学研究室だったのです。小林先生が赴任されて 5 年目の春、教養部を終えて学部進学した私

は、小林先生が指導する「生理グループ」に所属し、小林先生から脳の構造と機能についての基礎を学ぶとともに、授業では心理学実験の基礎的手法を教えていただきました。

当時のエピソードをひとつご紹介いたします。私は、重症心身障害児の生理心理学的研究を進めていた川住隆一氏（当時博士課程1年、現東北大学教育学部教授）のもとで、重症心身障害児を対象にした条件反射形成に関する卒業研究に取り組んでいました。ところがその川住氏が国立特殊教育総合研究所に就職が決まったため、直接指導してくれる院生がいなくなり、私は大変焦りました。そのとき、川住氏に代わって小林先生から実質的な指導教官として論文作成に関わる指導・助言をいただきました。ここで改めて御礼申し上げます。また、私が障害児施設で実験中に実験装置の調子が悪くなったときなど、不具合を調整しに車できていただいたこともありました。当時は研究グループの夏合宿などもやっていて、生理グループでは小林先生も含めて7、8人で十和田湖・田沢湖へ行って男ばかりで遊んだことも思い出に残っています。

小林先生は東北大学助手として15年間勤務されましたが、その頃の研究成果は知的障害児の誘発電位に関する論文や知的障害児の『利き手』の発達に関する論文（香川大学の黒田直実氏との共同研究）としてまとめられています。

1988(昭和63)年4月、埼玉大学教育学部に助教授として赴任、以来22年間、学生指導、研究、学部運営に携わってこられました。学部では、一貫して障害児の心理・生理学分野の授業をご担当になり、前述のように厳しい授業により多くの学生から“恐れられ”ていましたが、他方で“脳のコバヤシ”とも呼ばれ、先生のおかげで学生の人間の脳に関する知識は相当深まったものと思っています。

毎年の演習の授業では、しばしば外国文献をテキストにしておられました。英語の苦手な学生などはかなり苦しんでいましたが、この分野の研究には英語力は欠かせないものなので、学

生の訳文を添削するなどいねいに指導されていたようです。学生時代に精力的に学んだロシア語では『夢のサイエンス』（シェポバリニコフ著、黒田・小林共訳、青木書店、1991年）を訳出されておられます。この本は生理学的立場から夢や睡眠の仕組みについてわかりやすく書かれたもので、当時の脳科学研究の成果を夢や睡眠の理解につなげようとする意欲的な本であり、現在の脳科学研究の隆盛を予言するような意義ある本だと言えます。

発表された小林先生の論文を見ますと、その研究領域は大きく3つに分けられるように思います。

ひとつは、視覚誘発電位の発達の研究です。誘発電位とは、一定の刺激によって末梢または中枢神経系の当該部位に誘発される電位反応をいい、誘発反応とも呼ばれているものです。この誘発電位の研究と臨床応用が急速に普及したのは1970年以降ですから、まだ研究上の蓄積が乏しい子どもの誘発電位の研究は先駆的業績と言えます。小林先生は一連の研究で、視覚刺激に対する脳の反応性をみる視覚湯発電位を調べ、誘発電位のタイプを分類・整理し、その発達特性を明らかにしています。ちなみに当時、仙台の東北大学には脳波をAD変換し、加算処理できる大型計算機がなかったため、生理グループで東北大学医学部附属病院鳴子分院までかけて、計算機をお借りしてデータ処理したこともありました。もちろん鳴子は有名な温泉地ですから、夜は温泉に浸かり、ゆっくり身体を休めたのは言うまでもありません。

もうひとつの研究の柱は利き手の研究です。小林先生は黒田直実・香川大教授と共同で利き手の評価法、利き手の発達、利き手と言語発達との関係等について実験的研究を重ねてきており、興味深い知見が報告されています。

3つめは、これが現在につながる研究領域だと思われませんが、発達障害児の神経心理学的研究です。神経心理学とは古くは大脳病理学、臨床脳病理学と呼ばれていたものです。脳の損傷

(あるいは実験的操作)によって、心理機能がどのような影響を受けるかを研究する医学と心理学が融合した学際的学問分野です。知的障害児は損傷部位が必ずしも明確でない場合が多いのですが、各種神経心理学的検査によって対象児の心理機能の障害を検索し、その結果を利用して有効な指導法を検討することが期待されています。

小林先生は、まず成人の脳損傷者にみられる記憶障害の神経心理学的研究からはじめ、その後発達障害児を対象に注意・同時処理・継次処理・プランニング等の心理機能の発達を調べる「神経心理学的検査法」を開発しています(平成8年度～平成10年度 科学研究費補助金)。この研究成果は『発達障害児における神経心理学的研究』(小林久男編、多賀出版、2000年)として出版されました。

障害児の発達神経心理学的研究に関わる研究者は少なく、小林先生の一連の研究は高く評価されています。その一端は業績一覧にあるように、ほぼ毎年のように科学研究費補助金を受けていることからわかります。

退職が近づいてきた昨年、補正予算のからみで各大学に大型の予算が回ってきました。小林先生はさっそくNIRS(ニルス)という最近開発された近赤外分光法を使った脳活動計測装置(光トポグラフィーとか光脳機能イメージングとも言います)を申請したところ、運良くその購入が認められ、本講座の実験室に導入されました。この装置を使うと頭皮上から非侵襲的に脳機能をマッピングすることができます。小林先生は現在この装置を使って精力的に実験研究を進めています。NIRSによる障害児研究はまだ少ないことから、どんな研究成果がでるか、大いに期待されるところです。

ところで、もうひとつ小林先生の研究にかかわる活動でご紹介しておきたいことがあります。それは「発達科学研究交流会」と命名されている埼玉大学、茨城大学、筑波大学、東北大学、宮城教育大学、上越教育大学、東北生活文化大

学、茨城キリスト教大学等の国公立大の障害児教育研究者、大学院生、学生等が年2～3回程度集まって、合宿形式で研究発表と討論を行っているインターカレッジセミナーとでもいべき活動です。参加者は60名ほどですが、学生にとっては、大学の枠を越えて学生同士が自由に討論できる場であり、知的刺激をうけるまたとない機会になっています。小林先生はこの研究会の第1回から参加している中心的メンバーです。この研究会の第1回は東北大学が幹事校となり、前述の鳴子温泉・碧山荘にて、1979(昭和54)年5月に開催され、現在まで約30年、100回を越えて現在も続いています。障害児研究分野以外にもこれほど長く続いた研究会は寡聞にして知りません。小林先生は、毎回ゼミ学生を連れてこの研究交流会に参加してきています。これも学生たちに他大学の学生の研究や問題意識から何かを学んでもらいたいという願いからだと思えます。

最後になりましたが、学部運営面では、教務委員長、進路指導委員長等を歴任され、この間の学部の円滑な運営にご尽力いただきました。また、講座運営では、臨時教員養成課程(情緒障害教育)や特殊教育特別専攻科の創設、大学院障害児教育専攻の独立に尽力されました。学会における活動としては、日本特殊教育学会の常任編集委員、障害者問題研究編集委員などをお勤めになり、わが国の学術・研究体制の発展にもご尽力いただきました。さらに社会的活動として、科研費審査委員、特別研究員審査委員のほか、埼玉県就学指導委員会委員、県認定講習講師、旧与野市就学指導委員等を長く努めるなど、地域の特別支援教育の発展にも貢献してこられました。

小林先生には、定年によりご退職となりますが、特別教員としてお残りいただき、もう少しの間教育・研究にお力添えをいただくことになっております。先生のご研究がさらに一層発展していられるようご祈念申し上げます。

略 歴

氏名 小林久男

生年月日 1945年10月10日

現住所 埼玉県さいたま市見沼区南中丸588-1

学 歴

1969年3月 東京学芸大学初等教育教員養成課程（教育心理選修）卒業

1969年4月 東京教育大学大学院教育学研究科実験心理学専攻修士課程入学

1972年3月 同上 修了

1972年4月 東京教育大学大学院教育学研究科実験心理学専攻博士課程入学

1973年3月 同上 中退

職 歴

1973年4月 東北大学助手教育学部

1988年4月 埼玉大学助教授教育学部

1997年4月 埼玉大学教授教育学部 現在に至る

1999年4月 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程（発達支援講座）併任
現在に至る

所属学会等

1972年4月 日本心理学会会員（2009年まで）

1973年4月 日本特殊教育学会会員（現在に至る）

1973年4月 日本教育心理学会会員（2009年まで）

1983年4月 日本生理心理学会会員（現在に至る）

1989年4月 日本発達心理学会会員（現在に至る）

1996年4月 日本神経心理学会会員（現在に至る）

研究業績

1 著書

1990年10月 「脳の外観・脳の三つの基本的機能単位系（ルリヤの脳モデル）」、「大脳
両半球の非対称性と相互作用・システムの動的局在論」、「認知情報処理
と P300」、松野豊編著『障害児の発達神経心理学』青木書店、第1章、
pp. 9-14、pp. 18-25、pp. 25-28、pp. 64-73

1993年4月 「神経心理学的立場からみた記憶障害」、松野豊編著『障害児の発達神経心理
学』文理閣、第4章第4節、pp. 330-351

- 1998年4月 「記憶」、松野豊・茂木俊彦編『講座発達保障2 障害児心理学』全国障害者問題研究会出版部、第Ⅱ部第3章、pp. 178-195
- 2000年2月 「研究の目的と意義および理論的背景」(第1章)、「神経心理学的検査の構成」(第2章)、「健常児における神経神学的研究」(第3章)、「知的障害児における神経心理学的研究」(第6章)、「総括と今後の課題」(第9章)、「補論」、小林久男編著『発達障害児における神経心理学的研究—注意・同時処理・継次処理・プランニングの発達と障害—』多賀出版、pp. 3-28、pp. 29-40、pp. 41-77、pp. 153-168、pp. 233-247、pp. 249-286
- 2003年1月 「脳の機能の発達と障害」、黒田吉孝・小松秀茂編著『発達障害児の病理と心理/改訂版』培風館、第3章、pp. 25-36
- 2010年9月 「子どもの発達と脳科学」、清水由紀編著『学校と子ども理解の心理学』金子書房、第1部2章、pp. 15-32

2 学術論文

- 1973年10月 「誘発電位の多変量解析の1例」『臨床脳波』、第15巻第10号、永井書店、646~649頁(岩原信九郎、小林久男)
- 1974年4月 「連続光刺激呈示に対する平均誘発電位の変化—因子分析法の適用—」『脳波と筋電図』(日本脳波・筋電図学会編)、第2巻第3号、191~200頁(小林久男、岩原信九郎、松永勝也)
- 1974年12月 「子どもの覚醒安静時脳波」『欠陥学研究ノート脳と心理』(東北大学教育学部欠陥学教室編)、35~55頁
- 1976年3月 「ヒトの頭皮上視覚誘発の頭皮上視覚誘発電位の発達の研究(I)」『東北大学教育学部研究年報』、第24集、241~254頁
- 1976年8月 「パブロフ条件反射学説の再検討」『心理科学と実践の結合をめざして』(心理科学研究会編)、66~70頁
- 1978年3月 「ヒトの頭皮上視覚誘発電位の発達の研究(II)—これまでの研究の動向と展望—」『東北大学教育学部研究年報』、第26号、245~259頁
- 1979年3月 「ヒトの頭皮上視覚誘発電位の発達の研究(III)—視覚誘発電位のタイプとその発達特性—」『東北大学教育学部研究年報』、第27号、337~352頁
- 1981年2月 “A statistical method of component identification of average evoked potentials” International Federation of Societies for Electroencephalography and Clinical Neurophysiology. ELECTROENCEPHALOGRAPHY and CLINICAL NEUROPHYSIOLOGY, Vol.51, No.2, pp. 213-214 (Hisao Kobayashi, Kiyoshi Yaguchi)
- 1981年7月 “Regional relationship of visual evoked potentials in infants and

school-aged children” International Federation of Societies for
Electroencephalography and Clinical Neurophysiology.
ELECTROENCEPHALOGRAPHY and CLINICAL
NEUROPHYSIOLOGY, Vol.52, No.1, pp. 36-41 (Hisao Kobayashi,
Kazuma Toyomura)

- 1982年3月 「利き手の評価方法についての方法的検討」『高松短期大学研究紀要』、
第12巻、47～62頁（黒田直実、小林久男）
- 1982年7月 「脳の電気活動（誘発電位）からみた脳機能の発達と障害」『障害者問題研究』
（全国障害者問題研究会編）、30号、40～51頁
- 1984年3月 「中度精神薄弱児の利き手の発達について」『特殊教育学研究』（日本特殊教育
学会編）、第21巻第4号、36～43頁（黒田直実、小林久男）
- 1985年3月 「人間の情報処理と事象関連電位」『東北大学教育学部研究年報』、第33集、
167～202頁
- 1986年12月 「重度精神薄弱児における利き手の発達と言語発達の関係」『特殊教育学研究』
（日本特殊教育学会編）、第24巻第3号、33～40頁（黒田直実、小林久男）
- 1987年3月 「精神遅滞児の標的検出過程における心理生理学的特性—長潜時陽性電位P3
よるその発達の検討—」『特殊教育学研究』（日本特殊教育学会編）、第24巻第
4号、40～50頁（小林久男、松野豊）
- 1987年3月 「事象関連電位と発達及び発達障害」『東北大学教育学部研究年報』、第35集、
139～154頁
- 1987年11月 「精神遅滞児における 図形描画の発達の検討—神経心理学的観点からのアプ
ローチ—」『発達障害研究』（日本発達障害学会編）、第9巻第3号、214～222
頁（小林久男、田中克典、中谷恭子、松野豊）
- 1990年3月 「記憶障害の神経心理学的研究—ルリヤの見解と研究方法論について—」『埼
玉大学紀要教育学部（教育科学）』、第39巻第1号、47～58頁（小林久男、
松野豊、小林寛子）
- 1991年9月 「埼玉県障害児学校における教育内容の到達動向—アンケート調査—」『埼玉
大学紀要教育学部（教育科学）』、第4巻第2号、17～27頁（西村章次、清水寛、
小林久男、宗澤忠雄）
- 1993年9月 「脳損傷者および自閉症者における同時総合活動と継次総合活動」『埼玉大学紀
要教育学部（教育科学）』、第42巻第2号、35～44頁（小林久男、西村章次）
- 1995年3月 「脳損傷者の記憶障害—前頭葉損傷者及び後頭—頭頂葉損傷者の健忘事例の
検討を中心に—」『心理科学』（心理科学研究会編）、第17巻第1号、38～50頁
（小林久男、小林寛子）
- 1995年11月 「障害児研究における神経心理学の意義」『障害者問題研究』（全国障害者問題
研究会編）、第23巻第3号、4～14頁

- 1996年3月「利き手と潜在的利き手の関係－発達と性差の点からの検討－」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』、第45巻第1号、65～71頁（小林久男、佐野ゆかり）
- 1996年6月「精神遅滞児の利き手に関する研究－性差、遅滞の程度、親の利き手との関係について－」『特殊教育学研究第』（日本特殊教育学会編）、34巻第1号、9～17頁（小林久男、佐野ゆかり）
- 1996年9月「左視床損傷の健忘事例の検討」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』、第45巻第2号、1～11頁（小林久男、小林寛子）
- 1997年9月「視床損傷患者の急性期・亜急性期における神経心理学的検討」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』、46巻第2号、17～27頁（小林寛子、水越輝知、平野幹雄、小林久男、黛朋子）
- 1999年3月「神経心理学的検査からみた注意・認知過程・プランニングの発達」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』、48巻第2号、103～116頁（小林久男、小林寛子、金谷彰子、吉川千絵）
- 2001年9月「発達障害児の理解との支援への手だて－知的発達遅滞児2名についての神経心理学的検査の結果を通して－」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』、50巻第2号、19～28頁（須藤幸恵、小林久男）
- 2002年3月「注意の神経心理学的検査とその健常児における検討」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』、51巻第1号、25～36頁
- 2002年9月「発達障害児の幼児期における行動評価の検討」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』、51巻第2号、9～16頁（小林寛子、須藤幸恵、小林久男）
- 2004年3月「自閉的傾向を持つ知的障害児への支援の検討－神経心理学的検査及び知能検査の結果を通して－」『埼玉大学教育学部附属教育実践センター紀要』、第3号、131～138頁（須藤幸恵、小林久男、小林寛子）
- 2004年9月「ダウン症児の言語発達支援に関する研究－格助詞を含んだ構文の指導効果の検討－」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』、53巻第2号、51～65頁（朴敬蘭、小林久男）
- 2005年3月「学齢児童における実行機能の検討」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』、54巻第1号、143～154頁
- 2005年9月 “A Clinical Study on the Support of Language Development for a Child with Down’s Syndrome” *Journal of Asia-Pacific Special Education*, Vol.5, No.1, pp.13～33 (Kyoung Ran Park, Hisao Kobayashi, Byung Ha Kim)
- 2007年3月「健常児と自閉症児の実行機能の発達－次元の異なるカード分類課題による検討－」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』、56巻第1号、109～118頁（範例、小林久男）
- 2007年9月「健常学齢児における遂行機能障害症候群の行動評価（BADs）の検討」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』、56巻第2号、49～57頁（小林久男、小林寛

子)

- 2008年9月「重篤な頭部（脳）外傷児における高次脳機能障害の回復過程について—7年間の縦断的検討—」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』、57巻第2号、133～144頁（小林寛子、山口友美、靱負正雄、下平雅之、小林久男）
- 2010年3月「健常児童及び注意欠陥多動性障害（ADHD）児における持続的注意—視覚性持続的注意検査「もぐら—ず」による検討—」『埼玉大学教育学部附属実践センター紀要』、第9号、91～100頁（小林久男、小林寛子、下平雅之、小林アエ子、須藤幸恵）

3 科研費報告書

- 1983年3月「健常児童並びに精神遅滞児における視覚誘発電位の発達の検討」『認知発達とその障害に関する精神生理学的研究（昭和57年度科学研究費補助金研究成果報告書〈一般研究B、研究代表者：松野豊〉）』1～19頁
- 1983年3月「凶形弁別事態における事象関連電位P3成分の発達の検討」『認知発達とその障害に関する精神生理学的研究（昭和57年度科学研究費補助金研究成果報告書〈一般研究B、研究代表者：松野豊〉）』21～31頁
- 1999年3月「発達障害児のための神経心理学的検査法の作成」『平成8年度～平成10年度科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究（C）研究代者：小林久男）』1～109頁
- 2004年3月「発達障害児のための神経心理学的検査の開発と発達援助に関する研究」『12年度～平成14年度科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究（C）（2）研究代者：小林久男）』1～63頁
- 2007年4月「発達障害児のための神経心理学的検査の開発及び発達支援プログラムの作成とその実践」『16年度～平成18年度科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究（C）（2）研究代者：小林久男）』1～76頁
- 2007年4月「神経心理学的検査—マニュアル&記録用紙」小林研究室、52頁

4 翻訳

- 1970年8月「注意の範囲と記憶の範囲の神経生理学的基礎」ソビエト心理学研究9・10号、ソビエト心理学研究会編、19～31頁
- 1991年2月『夢のサイエンス』青木書店、224頁（黒田直実、小林久男）
- 1994年9月「脆弱X症候群の発達に関する諸問題」小松秀茂・清水貞夫監訳『障害児理解の到達点—ジグラー学派の発達論的アプローチ—』第9章、田研出版、273～294頁
- 2006年4月「力なき者と倫理の問題、インフォームド・コンセント」西村章次監訳『福祉が人を弄んだとき』第13章、ミネルヴァ書房、158～172頁